

## 荒鷲の要塞

(立山カルデラでの仰天！)

五組 柳川壱信

4組・篠窪弘行さん近況報告の野鳥で刺激を受け、昔を思い出しての投稿です

.....

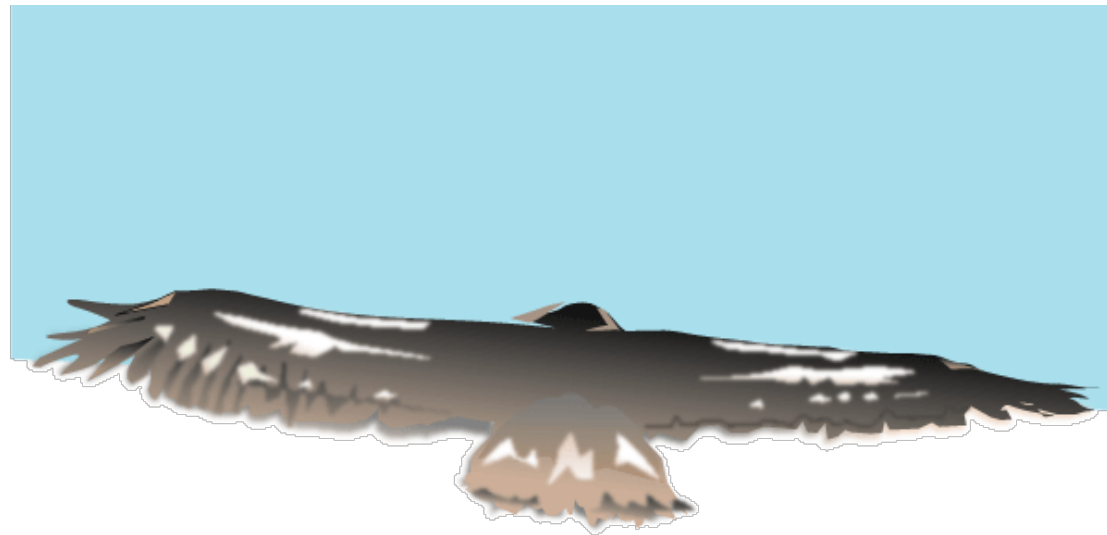
五十年ほど前の家族旅行で、中部山岳国立公園特別保護区の立山へ、バードウォッチングにやってきた。

立山室堂の弥陀ヶ原ホテルに着いてすぐ、フロントから案内された立山カルデラに向かった。二十分ほどのハイクで樹林帯を抜けると、視界がひらけて行き止まりの崖へ出るや、そこでいきなりホシガラスと出くわした。

頭为天辺こそ焦げ茶だが、ほぼ全身チョコレート地に、その名前の由来のように一面白班の模様が星のごとく配された美しい野鳥である。黒い目も大きめではっきりとして美顔とっていい。ハトほどの大きさで、とてもカラスの仲間とは思えない。

そのホシガラスが数羽、針葉樹の枝先にたむろしている。と、特有のしわがれ声を発している。その声はやっぱりカラスの仲間であった。それでも初めての出会いに、僕らは興奮気味に見入った。

しばらくして僕は一人その場から離れ、崖の淵に近づいて、谷底を覗き込んだ、その時だった。



数メートルか僕の目と鼻の真下に、巨大な獣色の翼のようなものがふわっと前方に飛び出した！何だこれは？腰を抜かすほどの仰天だった！

慌てながらもよく視ると、白茶がまだらに混じった暗褐色、目一杯両翼を広げて幅二メートルを超えるか、畳より大きな鳥の背だ。すぐ眼下にあった。そのまま、飛び乗ることのできる近さである。

それはまさしく猛禽イヌワシであった。イヌワシをすぐ真上から覆いかぶさるように見たのだ。咄嗟に家族に知らせようとしたが、声を発してはならない思いであったのか、声が出なかったのか、ただ夢中で下方を何度も指差すばかりであった。彼らに目視できただろうか？

覗き込んだ崖のすぐ真下に、イヌワシの居場所があったのだろう。イヌワシは真上に物の気配を感じて、とっさに逃げたのだ。

ハッと我に返って落ち着いた頃には、その姿は遙か向う岸の上を悠々と飛翔していた。

岸という表現が妥当な形状の地形で、その時初めてそこが大きな陥没地帯、カルデラと気付いたのだ。その規模は直径数キロにおよび、深さは数百メートルもある立山カルデラであった。その深遠な淵で巨大なイヌワシに異常接近したことになる。

彼らは人間の視力の8倍にも及ぶ能力の眼をもって1キロほどの上空から野原にうごめくウサギや蛇、ヤマドリ類を確認するや、両翼をすぼめて時には300キロを越える超高速で急降下、捕獲するという空のハンターだ。時には小鹿も狙うという。

またイヌワシに限らず彼ら鳥類は、人間が知覚する三原色を上回り、紫外線を加えた四原色も知覚しているようで、高度な識別能力を発揮しているという。

人間にもごくごく稀に四原色を知覚出来る超能力の人が居るらしい。近年英国で確認されたそうで、この女性に見える世界は通常の人間の知覚する百万色の百倍にあたる一億色が見えていることになるそうだ。また同じ能力を持つ女性画家が居て、この方が描く世界は色彩が全く異質らしい。別世界を観ているのだろう。

したがって猛禽類は想像を超えた色覚による高い識別能力を以ってこの地球上を俯瞰していることになる。とりわけイヌワシは眼球の構造や視神経に特別な機能が付与されて超遠視力を備え、人間より遙か遠くの異次元を見やっているようである。他を寄せ付けない尊厳な存在なのだ。

さて、このカルデラは適度な野原らしきところも内在していて彼らにとって格好のテリトリーになっているのだろう。そのテリトリーを見下ろす程良いところ、断崖に拠点を設定していたのである。断崖は育児中にも外敵から幼鳥を守るに適したところである。僕は偶然、いわば「**荒鷲の要塞**」のすぐ上にお邪魔してしまったのだ。

なお、現在イヌワシは日本全国で推計五百羽ほど（日本イヌワシ研究会）と云われているが、まだ把握されていないようで、絶滅が心配される天然記念物であり希少野生動物として指定されている。